

# 仏教学を志して

片 野 道 雄

今年度は、おおよそ百二十名前後の二回生諸君が大谷大学仏教学会という学会の会員になりました。新入会員の歓迎ということで、第一部として何か一言、お話することになりました。貴重な時間を拝借することです。どういふ話題で進めていくか戸惑っております。研究発表でもいけませんし、漫談でもふさわしくないようであります。頭を痛めているのでありますが、どうも雑談になりそうでありますことをお許し願います。この時間帯は、諸君たちの大事な「仏教学基礎講読」、あるいは「インド学基礎講読」の時間でありまして、この催しに当てられているのでありますが、それだけに、私自身としてやや心苦しい思いと精一杯という気持ちで交錯しているのであります。諸君たちは本学の仏教学科に入学され、只今、二回生を迎えられました。そして、この一年間を無事、また有意義に取り組まれますと、三回生への進級と共に、専門の学習分野が絞られ、ゼミを中心にした学習、研究が進められる事と思います。そういう諸君たちの歩みを予想します時、これからの一年間の取り組み方については既にお判りのことと思います。色々な講義、講読、あるいは、友との語らいを通してながら、分野とか研究課題が定まっていらない諸君は、自分の関心の持てそうなところをできるかぎり煮詰めていただきたいのであります。そういう意味からも、今日のこの機会を受けとめていただけたらと思うことであります。

さて、本学の仏教学会に入っていたいただいた歓迎の気持ちをよく抱きながら、お話を進めることでありますが、諸

君たちの新鮮でういいういし志し、あるいは、発想と何処かで出会うことを期待して、このような「仏教学を志して」というテーマを提出したことであります。テーマの提出後、折々に考えるのですが、なかなか中身が定まらないのであります。お互いに学びとして取り組む仏教学の学的領域は、もうすでに皆さん方もご承知の通り、非常に広く、かつ、奥が深いのであります。加えて、地理的な方面からも、時代の経緯からも、想像を絶するものを感じます。そこから生まれてくるテーマも多種多様であります。ですから、それらすべての事柄を視野に置くということはないがたいことでありまして、限られたところで話を進めさせていただくことであります。

ブッダ以来、仏教の伝承と展開の歩みにおきまして、特に、インドの大乗仏教、多分そういえば、諸君達も昨年度の基礎学で概観したことを思いおこされと思います。そのインドの大乗仏教の、唯識仏教について話題とするのであります。すでに皆さん方ご承知のとおり、インドの大乗仏教におきましては『般若経』をはじめとして、いろいろな大乗仏典が出現してきました。そして、それらに基づいて大乗仏教の本質が思想的に開顕されようとしたのはこれもご承知のナーガールジュナ（龍樹）、アールヤデーヴァ（聖提婆）などによるのでありまして、さらにその後また改めて大乗仏教が課題とされてくるのであります。その課題にまた改めて取り組み、明らかにしようとした仏教者はマイトレーヤ（弥勒）・アサンガ（無著）、ヴァスバンドゥ（世親）などであると伝えられます。その改めて課題とされてくる大乗仏教がいわゆる唯識の仏教とか、唯識仏教と一般に呼ばれておりますが、その唯識仏教とは何かという問いは大変難解な問いかと思えます。実は、大乗仏教がどうして起こってきたか、という課題についても、先輩諸師によって色々と推定され、諸々の所説が見られるのであります。唯識仏教の興起については、ともかく『解深密経』の「三時の法輪」がその基底に見做されております。そして、唯識の関係するテキストでは、その特色の一点として、あの名高い仏典の一つであります『ダンマパダ』の第一偈に「諸法はここに支配され、ここを主として、ここよりなる」と伝承しておりますような、そのようなブッダ以来の伝統のもとで、人間の現生存がここらという

有り方の上に問題提起がなされているのであります。

先程も述べましたように、『般若経』をはじめとする仏典を通じて、ナーガールジュナやアールヤデーヴァなどは大乘としての仏教の原点を極めて明解なありかたで提起していることであります。そういう状況にありながら、ナーガールジュナから百年のちですが、百五十年後ですか、また改めて大乘の仏教というものが確かめられてくるのであります。先程の『解深密経』という仏典がそうでありますし、マイレーヤとかアサンガ、あるいは、ヴァスバンドゥという人々の著作、作品類にはそのことが窺われることであります。

その後の仏教者たちは、前者の大乘の仏教展開の流れにある仏教の在り方を「中観」といい、後者の在り方を「唯識」とか「瑜伽行」という言葉遣いで呼んでいるようであります。私どもは中観仏教、唯識仏教と通称で述べているのであります。言い伝えによりますと、ある偉大な仏教者は、その中観の仏教と唯識の仏教はインドの大乘仏教の車輪であって、車の車輪のごとく力づく押し進められてきた、というふうに述べていることであります。

そこで、特に唯識仏教のうえで話を進めるのでありますが、マイトレーヤ、アサンガ、ヴァスバンドゥという人たちの作品は非常に沢山伝えられております。一応、それらの作品の代表的なものは、すでにご承知のことと思います。が、先輩たちによって読み込まれ、理解され、初心者にも参考にできるような解説書として、あるいは、英語、ドイツ語などの欧文や、和文で現代に通ずる言葉遣いで比較的に近づくようになってきております。しかし、その和訳によりまして、ある種の小説を読むようにはストレートに理解できないところもありまして、時には原典、テキストに基づいて確かめないとどうしようもない文節もありますが、ともかく、現代語訳によるものも沢山見られることであります。少し話題が変わりますけれども、次のような点も念頭に置くべきかと思えます。唯識の仏教につきまして、これもよく言われていることでありますが、ヨーロッパの東洋学者たちが仏教研究をはじめた行き方といえますか、そういう仏教学でない、明治以前の中国から日本に伝わって研鑽された、伝統的な仏教学、唯識学によっ

て、唯識の仏教がわれわれに伝承してきております。たとえば、あの名高い中国の高僧、玄奘という方が漢訳されたものの代表作の一つに、『成唯識論』という仏典があります。この仏典には、唯識の学びをした唯識学者、スティラマティ（安慧）、彼は西暦六世紀ころの人ですが、それに、難陀とか陳那（ディグナーガ）、さらには護法（ダルマパラー）に至るまでの十人のインドの唯識学者の見解を紹介しつつ、ヴァスバンドゥの『唯識三十頌』論に対する説明や解釈がなされております。特に、そこには、スティラマティと同時代の護法という仏教者の唯識学が伝えられていると言われます。玄奘という方はご承知のとおり、当時の中国における唯識の理解解釈の仕方に疑問をいだき、唯識仏教の根源を尋ねて聖地インドに赴いたとも伝えますが、そういう心血を注いで漢訳された『成唯識論』を中心とする唯識学でありますから、中国の仏教におきまして大変重要視されます。したがって、また、玄奘の門弟によりましてそれに対する注釈書が著され、中でも、三つの注釈書はその『成唯識論』に基づいて唯識を学ぶ上で、欠くことのできないものとされます。それらを中心にして非常に驚くべき唯識の学問研究も形成されました。荒っぽい要約ではありますが、日本における明治以前の唯識学はそういう行き方が主流であったかと思われまゝ。これも見逃すことのできない大切な唯識学の歩みであります。

ところで、また一方、時代的に見ますと、明治以降とでも言いましょうか、先ほども述べましたヨーロッパの東洋学者たちによりまして、サンスクリットとかパーリ語、チベット語という、いわゆる、インドやチベットにおける仏典の文献資料が漢訳資料とともに重視され、それらによる解明の成果が提起されてくるのであります。参見可能なあらゆる資料を批判的のと言いますか、それらの資料を比較対照することによって検討しつつ、その仏典の本質に迫ろうとする行き方で、その行き方を近代仏教学という行き方としてそのように理解しているのでありますが、そういう行き方による唯識学の取り組みもなされてきているのであります。

このようにして、サンスクリット文献やチベット語文献をも視野に入れて、インドの唯識仏教が解明されてきた今

日、その唯識の仏教の思想形態の特色として新たな側面が掘り起こされてきております。日本においても強く伝えられました、護法という仏教者によるところの唯識とはまたその傾向を異にした、あるいは、幾らか趣きの違った課題が、こうした近代の仏教学によって提起されていることでもあります。

と言いましても、唯識に関して大変膨大な資料がありまして、今後まだまだ解明されなくてはならないテキストとか、未だ解明されていない文献が沢山残存していることであります。特に本学におきまして、縁の深い仏教文献として『チベット大蔵経』という資料が図書館に所蔵されてありますが、チベット文献類に関しましては、解明されなくてはならないものが随分とあることであります。そういうことから、諸君たちの中から、一人でも二人でも、取り組んで下さったらと期待されていることであります。狭い分野からの発想ではなく、世界的な仏教学の流れとして、そういう方も是非育ってくださったら、と期待されることであります。

さて、マイトレーヤ（弥勒）からアサンガ、ヴァスバンダに伝承しておりますところの唯識仏教についてであります。それらの仏教者たちは一体、大乘としての唯識仏教の上にどのようなことを志し、その時代の人々にどのようなことを提起しようとしたのであろうか、というようなそのような素朴な問いも浮かぶのであります。そして、その提起される課題が現代のわれわれの上においてどういう意味をもつのであろうか、というようにも問われてくるのであります。その唯識仏教の主な課題は何か、あるいは、唯識とは一体何か、という問いもよくわれわれに投げかけられる問いで、大切にしたい問いかと思えます。

マイトレーヤは漢訳で弥勒とも言われますが、あの弥勒菩薩といわれる菩薩であるか、それとも、歴史上の実在人物であるか、という問いは今からおよそ六十年ほど前に学的に問われたことであります。今日もその問いは続いておりますが、中国あるいはチベット仏教における伝承によりますと、弥勒に五つの作品が帰せられております。中国の仏教資料とチベットの伝承とによってその五つの作品の選ばれ方が違うのでありますが、ここでは、そのなか二つは

どの作品・仏典を取り上げて、只今提示しました素朴な疑問について少し考えてみたいのであります。ナーガールジュナとかアールヤデーヴァというあの偉大な仏者たちによって、大乘の仏道の根源が明示され、その偉業は仏教の根幹を尋ねるうえで重視されるのでありますが、そのような大乘の仏道の歩みが開始されてあって、またあらためて、マイトレヤとかアサンガは一体どんなことを思想的な課題となしたのでありましょうか。ここでは、「弥勒の五部論」という言い方で伝承しています、それら五つの仏典のなか、『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』を取り上げたいと思います。いずれも、詩頌からなっているのでありまして、それらの仏典の内容をいちいち吟味検討する時間はありませんが、只今は、書名を通じてと思っております。

これらの仏典の名称はよく聞かれる漢訳によるのでありますが、『大乘莊嚴經論』のサンスクリット名は、マハーヤーナストゥラ・アラムカラであります。マハーヤーナストゥラは大乘經、大乘の經であります。アラムカラは莊嚴であります、この仏典名によって表明されようとするところは、大乘經の意味を了解せしめやすく、經の意味を人々に近づけて説くこと（ウパデーシャ）を、この仏典名そのものは表明しようとしております。これは『莊嚴經論』に対する利他賢という人の注によって理解されるところでありますが、この時代におきまして、どうしても人々のうえに、適切でもっともふさわしい在り方で大乘の仏典の意味が了解されなくてはならないという、意図が窺われてくるのであります。その大乘の仏典名が特定できるか、定かでありませんが、特定されるとすれば、恐らく、『解深密經』とか『アビダルマ大乘經』が予想されます。この時代の人々に、より適切に、大乘という仏陀の教法、あるいは、大乘の在り方をあらためてよくウパデーシャする、というような意思が込められているのではないかと、とも思われるのであります。しかも、この時代にありましては、大乘仏教は仏説ではない、という課題が大乘者のうえに投げかけられているのであります。そういう大乘は仏説ではない、すなわち、大乘非仏説という問題提起も考慮されなくてはならないであろうと思われまゝす。

アサンガ、すなわち無著の弟として伝承されています世親、ヴァスバンダは、『釈軌論』という著作において本格的に論議を展開していることでもあります。大乘の、そういう教法は仏説ではない、仏教ではないという提起でありましょうが、それへの応答を通じて、改めて、仏陀の教法の根源的な確かめがなされようとした、ということでもあります。大乘仏教の起こりに因んだナーガールジュナの取り組みなども、そういう確かめ、確認がなされてきていることでもあります。また世親という仏者は、大乘仏教の道理といいますが、ブッダの智慧の世界、般若大乘をよく獲得するために、より主体的に受けとめた在り方として、唯識という学説を体系づけようとしております。それが、『唯識二十論』とか『唯識三十頌』であります。また、経の莊嚴として『無量寿経優婆塞持論』が漢訳に伝承していることでもあります。

大乘非仏説という反駁は、時代としては、ナーガールジュナ在世の後のことかと推定され、偉大な龍樹の大乘顕称の時機を経ているのであります。いかに大乘の興起が伝統的な部派仏教に波紋を呼び起こしたか、いくらか想像されることでもあります。大乘非仏説論に対して、唯識仏教のうえに、大乘仏説の合理性とともに、改めて大乘の偉大なことの確立がなされなくてはならない時代状況に応答しようとした証しを読み取れることでもあります。アサンガは自らの著書『撰大乘論』において、このような思想的な背景のもとで、大乘は仏説である、大乘はブッダの心髄を展開する教法である、というところに立って、『アビダルマ大乘経』という仏典に基づいて大乘が十種のすぐれた特質によって特徴づけられていることを表明しようとしているのであります。尤も『撰大乘論』では大乘非仏説という論議は直接しておりませんが、「大乘を該撰するの論」というこの『撰大乘論』もマハーヤーナストウラのウパデーシャとしての志向が窺われるのであります。この論書につきましては、後ほど時間の都合を見て、もう少し言及したいと思います。

次に、『中辺分別論』という仏典について管見するのでありますが、先輩はこのテキスト名を『中正と両極端との

弁別」とも和訳されています。「中」とか「中正」とはブッダ以来の仏教の本質を表明します「中道」のことでありまして、「辺」は極端な見方、考えて、わたくしたちの見方、考えのことでもありましょう。あらゆる存在の本質というものはつねに実在する、実有である、という「有」という極端論、あらゆる存在は実在しないという「無」の極端論、あるいはまた、存在しないことについて有と誤認したり、存在することについて無と誤認したりする観念を、よく判別する、明らかにするということ、そういう根本テーマをこの仏典は提起していると思われまゝ。

このような課題を念頭におきますとき、この時代の大乗仏教の思想的な使命と言いますか、この大乘について確認できることが更にあるのではないかと思われまゝ。先ほども言及しましたが、『解深密經』の「無自性相品」に見られる三時の法輪が想起されるのであります。少し時代がさがりますけれども、『瑜伽師地論釈』という注釈書がありまして、そこにもまた、同様の趣旨のもとに非常に手際よく要約された言葉が見られるのであります。なぜそのことを述べるかと言いますと、諸君たちもこれから本格的に仏教について学習を深められることでありまして、是非とも読んでいただきたい参考書がありまして、それが『仏教学序説』という書物であります。『瑜伽師地論釈』のそのような記述についてはその『序説』に取り扱われています。この『序説』は三十年ほど前に本学の先生方によってものせられたもので、わたくしたちは仏教学を進めていく上に大変お世話になっている書物でもあります。諸君たちにとっては少し判りにくい事情にあるかと思いますが、是非とも参照すべき一つに上げていただきたいのでありますけれども、その中に、『瑜伽師地論釈』のその一節が紹介されて、三時の法輪が解説されています。ここで、そのまの文章を読み上げても一寸判りにくいかと思しますので、説明を加えながら、要約したいと思ひます。仏陀入滅ののち、時代が経過するなかで、部派仏教、アビダルマの仏教ともいわれますが、その仏教の在り方で、ブッダ以来伝承するところを受けとめて、あらゆる存在、一切法は実在するという、有の立場、有とする執見、有見が、ブッダの心髄に基づいてナーガールジュナの『中論』などによって斥けられ、アールヤデーヴァの『百論』『四百論』などによって



ナーガールジュナの真意が弘く示された。ところが、そのことによって人々は空無の見解に固執することになった。すなわち、一切法は無自性、空という点から、大乘思想が非常に鮮明にされるとともに、有見、有執が遮遣され、ブッダの本来の真意が明らかにされようとしたのでありました。その使命を果たしたにもかかわらず、これによって空無の思想を文字通りに捉えていく空見に停滞することになって、すなわち、空を悪取して、間違った在り方で空が受けとめられるというような状況を引き起こしてきた。そこで、アサンガがマイトレーヤに請うて唯識の論書を説かした、というのであります。このように、唯識仏教の初期における重要な課題として有見、空無見の吟味という歴史的使命を表明していることであります。

先ほども述べました『中辺分別論』の「中」はこのような仏教の伝承の節目のうえて、仏教の原点とでもいうべきものとして、ブッダ以来の仏教の果たし遂げられようとしてきた「中道」を具体的にその時代の人々に提示しようとするのであります。唯識はそういう仏教の歴史的な、あるいは、思想的な背景のもとに、すなわち、有見への偏執の克服、また、その克服によってもたらされた悪取空、空見への偏執という現実の確かめを通じて中道の究明がなされようとしていることが窺われるのであります。そのようなことが仏典のテキスト名の上に窺われてくるのであります。

ともかく、『大乘莊嚴經論』にしましても、『中辺分別論』にしましても、それらはブッダ積尊の本意をその時代の人々の上に具体的に即応した在り方で尋ね、提示する。そして、改めてその大乘の教法はあらゆる人々にとって共有される偉大な乗り物であることを提起しなくてはならない、という宗教的使命の上に位置づけられるのでないかと推測されてくるのであります。

それらの具体的な説述としては、この世界はこころのうごき、心の顯れのみにすぎないという仏典の言葉に基づきつつ、識説とでも言いましょうか、心のうごきそのものの解明の上にアーラヤ識なども提起されてきます。われわれ

のこころの具体相、心のはたらく在り方、また、内容が非常に深く掘り下げて吟味されようとしています。そういう方面とともに、こころのそういったはたらきの在り方、これはまさしく唯識の仏教展開として、依って起こっている縁起なる在り方というほかり得ないのでありますが、そういう縁起の当体としてのこころのはたらきの在り方に視点を置いて、唯識縁起において有見とか、空無見に陥らない、まさしくの中道が実現される、そういう視点による無自性空という大乘の基本を開顯する行き方が、一方では顕著であります。

そのことは独特の言葉で表現しているのでありますが、「唯識ということ」とか「依他起」「遍計所執」「円成実」という用語による三性説とか、識を転じて智慧を獲得する転識得智、転依などの教説に見られるのであります。人間の現生存を根底から問う仏教の宗教性が窺われることでもあります。『般若経』など大乘仏典の方軌であります、大乘としての空無自性という、般若の智慧の世界を、改めて、唯識縁起の事体に即して打ち立てられようとするのであります。大乘の成り立ちがマイトレーヤからアサンガ、ヴァスバンドゥに至って改めて尋ねられたというのであります。しょう。それら種々の課題につきまして、解明されなくてはならない更なる研究課題に注意されてくるのであります。先ほども若干言及したことでありますが、アサンガには『阿毘達磨集論』という名高いテキストとともに『撰大乘論』の著作が伝わっております。ブッダの教説としての大乘の教説が確かめられようとしております。そして、その大乘仏教を該摂し、表明するについてその依り所とした『阿毘達磨大乘経』という仏典のことではありますが、今日その仏典の全貌は不明であります。その時代に整った仏典として流布していたかどうか、という点も未詳であります。やはり、そういう大乘経が掲げられるということは、大乘の仏説、非仏説という論議がアサンガにとっては比重大い課題であったであろうと推測されます。『撰大乘論』の序章の終わりの文節についても、それに対する注釈書には、この論書において大乘なる仏道が示されることになるとし、さらに、そのことは人間の現生存の上に大菩提をよく成就せしめるのであって、大乘が仏の言葉なるものとしてまのあたりに知らされることになる、と述べているのであり

ます。

以上、インドにおける唯識仏教の動向についていささか尋ねてきたのでありますが、唯識と言いますと、識説のうえに見られるように、人間の心理、心理分析というような在り方で捉えられがちでありますけれども、これまで尋ねてまいりましたように、ブッダ以来の仏教の本質をその時代の思想領域にあって、明確にしたい、大乘の精神というもの、ブッダの言教の密意をまのあたりに示すことを、その時代に対処した在り方で開顯していく、そのような動向というものを唯識仏教の根底に見据えなくてはならないのではないかと思います。そして、アサンガとかヴァスバンドゥが取り組んだその行き方には、ブッダの原点に帰るといふような事情が窺われるのであります。また、今日、種々の仏教のすがたに直面するのでありますが、そこで、偽物でない本来の仏教とか、その真偽を吟味しなくてはならない時代状況とも認識されたのでありまして、このような課題に対しても真に迫っていく行き方とあい通ずるものがあるのではないかとも思われます。すでに日本の仏教において、聖徳太子、あるいは、鎌倉時代のあの幾多の仏教者のあゆみにも窺われるようであります。が、仏教の流伝史の節目ふしめにはそのような動向があったのであります。

このような唯識仏教の動向を考察するなかで、その唯識とは一体具体的にどのようなように明示されようとしているか、そのような問題意識も当然起こるのでありまして、大切にしなければならぬ問いであります。仏教学のうえから唯識学を見ますと、あるいは一分野にすぎないかもしれませんが、どうもそうでない側面も窺われるようであります。

諸君たちは、少なくともこれから三年間、学として仏教学に取り組まれることであります。それぞれ目標を定めておられる方もありましようし、どうするか迷っておられる方もありましよう。何も考えていない諸君もあろうかと思ひます。それも承知の上で述べるのですが、是非とも、ナーガールジュナとか、アサンガ、ヴァスバンドゥなどの取り組みや歩みにおいて窺われますように、ブッダの仏教の心髄、願われているものとは何か、自己を通して人間という存在にとって仏教とはどういう在り方で動向しているのか、そういう素直な問いかけを特に大切にしたいのであり

ます。

只今は、いささか日頃取り組んでおりますところから、所感を述べたことでありますが、最初にも言いましたように、仏教は非常に奥が深く、ときには何のことか判らなくなる場合も一方ではあろうかと思えます。けれども、自分の判る範囲のところを順次押し進めていくということも大切なことでありまして、複雑に考えすぎてかえって難解にしていることもありましょう。結局いつの間にか大切なことが身に付くということでもあろうかと思えます。サンスクリットとか基礎講読が必修科目となっておりますが、仏教の資料をできるだけその資料にそって読み込み、考えていくための基礎になる性格の科目と受けとめております。時には忍耐といいますが、困難に耐えて、学びを進めていく態勢作りに積極的に努めていただきたいと思うことであります。

なお、最後に一言申しそえます。「われわれにとって仏教の原点は」という問いを大切にして取り組んでいただきたいことであります。ご静聴ありがとうございます。